

• 0 1 2 3 4 5 6 7 8
JAPAN 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

~13
1141



卷之三

卷13

1141

~13

二筋道三箇骨の注序

明治三七年正月

二筋道も三ツ右とし筋となす

二筋三弦の左は彈むる

筋乃立手絆ふのを並びぬも

意匠も刀も弓も切ひる程べ本

洞子の手考ふ二上と下べ三下

とあるとき階子へ假りのまんうへ
縦古近江の名所とつてもかむれきの
淫蕩にて合せりのも難くと稚園乃
開拓すりすも終はぬ砧の寂寥
相手アリて皆言葉を子ら手附
流り止りて前よワレよあて

見ゆて息勢もとて草紙亭
教く習ふせり妄言書紙
まく序を

作者

梅暮里谷峨





錄 目 總

方
一

ひよもれぬビヅキのやうひの間
あやうれむまきうふを残す
からゆくうみこゑむ

三

其

負居の白雲

卷之二

まよひをもひて
まよひをもひて
まよひをもひて

卷之三

の長

白樓の白兩

卷之二

そんへもれてもものひとれ
よみづれぬるやと子のるも
きよへざらんりや

之

其去

卷之三

卷之三

とまへりとまへりするよ
えびよ戸上戸やめよねとも

三

病の
生

口口
卷之四

二筋道三篇骨の程

榆暮里谷峨著

朝古今集よ契

あづかひてちゆい
一ひづねのまつめ

もどりうれしわどよひにゆく
世の中のやうれどもとととも又かへべら
云ふや文里へ一重よまくわづよみかねども

○第一 冬のふえ

冬の心

已まされどくわくふおきてくま死まば
風共しきタゞの行端のきわとまん風の音
さへひと物うく病まづからすれのへい妻乃
すせみくらしとをよる看病の醫くじよつけ
雪ゆきつけありひそかにふひの御先ご
言禁ミバの邦邦ナカガラ

童こども、時ときアソのまふ深切えんせつやそそむるやど
金沟きんこうくくれをうびらきけれども口ひまへせ

やうも下下どコラグ身みのつみのふをしくもうと二人の
きりそくの人のうたくらう歌うたもくもを懐いだひや
とがやうそうそゝ罪ちがいで今いまはぎぬそれとつとつの身みア
ト重ひくよ羅ら面めんを下さのうち懲こころとくよも男おとこ
主死おがつづくとよう深ふかよりうるうるとくよ
訓くにあきがよう病病つき一日いちうれきめもさせぞ
ばすみ別わかれとも今いま更またとすおはぬとくのうちの
憂銀雞うきんきやうひとを相あわつをひとかたみぬ

御寒よもすれもせぬひ涸つぎそれもくんまわ
ゆとろへばかくと面冒みの生面とお
まとうらそ病さまがりとう死キでえとびとあや
子休樂らきスうむせものうとよしこれのと
がふぞイケラヒて馬鹿馬よかうとよしのと
ひまく務めぐらすのうりかだら何なむもばれせくら
のやうごのけ悪縁あくえんあるかひををしてかんえ
きてとく

とをもう涙なづきよきとればお時ときもみきの
片言かたごんうぐら

妻め夫め + セそのやうよい年とひとちくやうちと
夫めのとあくうれかんうんま女房めうぶの役やそれがうんの
跡あとじくうそくア又またおまの傷いたの下したまん
よのゆひ中なか口くち告こする人ひとも物ものよも
初はじの中なかりえくうさんをかくうむもかくく
大切だいせきひこうとせう別べつでもめううと恨うらう

ゆきよひの夜毎もからむねがざくら
秩でさくらまんふるよほじと前や後へとぞうつた
のぞえをものすづらしきよろひるて口せんと
笑よかびし寐ね見みとゑみよ声のうきよ
のとよとせぬむのせうるきよ翌日あくよ
けつよ何なきう生なれりひざさんとるよ恨うらみ
ままか死死とえとへみをがくしくむじよからる
かくざとらべ懶だら氣きゆごくせやらううく

嬉うれりあさやかひとうようもエリヤと
それとたゞ二人の子を守まつめめわのむ一イ
苦勞くらうひふきドートをほん一イ日のうひよせざ
生死せいじまよわこころをかほりうきよ度カタて假ま
ども小ちよくせたよすすきとばくらんがくられーく
うふらんよむじのゆきよとひよ死死人じんされ
べかくまますたよりゆきよとゑ

とおもひうけすよらきておりやぬよ。にいがたくと
お寝のほぬむくすよ隠てらまがコロヤ
ましの日ゆく瘦おとくの塞さきもあまく病根ひぢんハア
一トまもんのよれよとそくやつとももあまきて
ゆれどせよあうとくえせぬアんきのさんさんが女子
のはくとでもへうまでこくへつまをあめざめく
憂愁うきぐもせあてへをもとうち半まも先さきのをと
ハ准じゅんゆくうへゆるまつゆゑゼムシくとうちわく

家いえをもよまのす苦勞くらうをもりうきましとひまう
ナセヌ

ト実じあくくとてなげくみぞ

文里みや何なにくらふまでのうかとみたその公底くみ今いま
貞实じんじみこゑこゑことく死しざざ生うくもせぬ隔へだ
く田舎いなかの一ト重じゆうがとまくよらみてせりのひを
ゆくまづくらうてまめよまめまづく
まづくらうて初はじからぬへんやまへせぬ

口にが慾圖りあらねども又ひとうせかなく
仲間中あらまく智惠すをもとぞれども
そのちまくわ今そのせみゆふうてへゑ痴よ
ひのむとがまくへさうくむりともりへりで
さうとかくやひが年ととよと兩人とまふよ
耳死まうせきとるがよごるものに孝りと女子ざて
らよ生うるわくまよのまべを思へてうきくと
して下さりや

文里へ言句のひつけの疾よりのとひ
せぬのとよと目さめて疾吉へよりの
う不セのぞたこひの歟とてとてと

文
候やよくまことのトル候キ **候**ナゼそのやうよ
ときんかまん候キ やう坊ガがくるへがんみすそ是
うちへをこうくまうやくよモウきのと下シるナ
ト子トもううぐらゆほりととゆぐらゆ
みどり文里アリあらぬもとくてもとくと

卷之三

トテハ乱一ノス男法ミ死ヒシテ之のハ子ニテ

ふゆのまゝへ　身ひてやうとと斗よみれいぬ
因堪忍えんゆくやく死しへあく、あをこうがちきてへるき
モウ多たまんかよコレコレもと壺つぼの菓子くだものをやつと
すや妻さいサアくこまとやからじじまんか 因いんアマラム
とせりうそ殊たらまで泣なきせと憎うらみひをうんどうする 因いん
勝かつへるい可か能のひとえんごめのを 文ふみ
ありとも弱よとらラびとそのまよひもけよづと

主ふるがはあひ子とらのぬやどとのうそとよせ
も涙のまひとうのまみ通ひ医セまみけうそとも
方カとうらふぐとめうらのちをえのまことのよ
うく御てゆうの文テまよふ物モノをもどシリヤ行村の
寛中の月とつゝ菫子スミ医セとまんゆうらのば
まんの夕ナゼはばへひれをまうね坊ボウもつよ
小往シマハのうスルとせゑエコレクリたるよく
トせがうちを絶スルの不るをもととのうとのう

おひす文里タリや妻の顔タタキえうざら

文アノ坊セかまひぐとチだまんハ田舎ハシマへりうて死ム
生リうほヒがうのクがきしてゆの大病オカシで全快センカイト、
おほきぬ今頃イマクハ土ツの下シタへものうトであるヨ医セセ
文モもいぐゲつるううて死ムであまうマロよ
アノ死ムと文死とくのせうまくマクいりのトがす
むう根ルのと医セセやアギヤドトみきミキと文

ちだきんがゆめうらをうけうきうきゆま
くまひどきやく既 さまえとかまんとアが初
トア、ちだまんとざんづくよふゆみのと團
オニコをまくまをあつてよふゆてくし
とくヨウマセトサトヨドヒロタヌとく
騎モウくらまさんおだきんの病氣びきもとや
トくらとちだまんのゆえゆゑやくそく
さくとスさくトモフタレ袖そくとよみうふゆま

サアミセカよ既 アノひづをまるの

トつうせつぐそつわる母カむカ
せのこして

妻 よ
せまつまつひひうざら本綿布子の洗
あうえんのこまがよひそ物ぞうんがそと
きまれでもうりへおせばをまでさりく
あるが不便あぶんモフカそのやうな外さの
アラのよりやんかそんのゆ勘局かくを

きべえみびへんせめぬ今まのうちと
あんがくしや 段 そくすればもひざがまくらき、

妻 からくともく 段 めくづくねうとよひ

がくまもちこあがえんむきまつてま

妻 モアツルねくらあくまやくふるること
やうゆめやくふとあんじやう甲斐ひわなく
くるあくび 段 そくやくふるくからうそく 妻

さんとうそくぐれいのうトナトタクカドねうと

何ゆくもとくある 段 そくしんくわうとさんゆ

どくわもとくぶくらふもひでよ 段 ラくよもく

こゑや疾けがくとばのそとくめくよとく
あくねど自イせんアミとくよみひくと行ハシせく
きくうやくつひよてかくねこきやくの
ゆゑまくあくましのく古アラ人のをえくう
まくひの雲モモをきて白日ヒとくよごくの日ヒが云
モウく一重チがとへあくと夕ハシもぎまとま

あそぶ

ト口ごとくどりでへ問ひ信のそと
さえりや一童がほりとあぐる海を
のむどろき妻のもとれのきさく
むづひぬ病のゆとつうふらぬ
みどりあてもむるがくぬのくえりや
痒ときりさら

卷之三

モエヘアタマツギー^カツの聲がやうがまくいへりまく

あす病やまいされば一すまうと廓くろへりてやまとを
まのとあんじまだせよトえりす文口きとりよ
ことやべらう今おひきつゝとひのく
からむくいそとほのきわらうがさぶる
であらよ妻それざうらうれにけでよ文
もねびひ文それとづく妻まこれ不文ど
ねびひまふともよきそとみのりのぞぎうま
モ文やくもくもういこと何くらうふまで
ぬけめうれまよと一重いっしゆうへやんあやうりのゆ
かぢとだらがある妻こよとづくもまく文
大切文そきやどすゞよこの馬ば康カウとあとと
つもまみ恩縁妻がひ令アマよど惣ワケもゆく
えん文モフリみてうさん医くもん寒ムシの文イヤ
まく雪シキがふうとあくまよごはんのゆくを
けき妻妻ハイ
火火とうちつけ音ヒうちく

序 開 者

先夏冬の床とこの初夏小

春午もるうまの承しゆね

後編ごうへんの去末さるひつらの

歳とど毎榮まつえ

二筋道骨ふたすじどうくつの程みち

其その亥い中なか

三浦みうらや一トえ

異見いきけんの文ふみ

古こ事じ記き古こ事じ記き

七情しちせうの人ひと小傳こてんりよろよろと見み物ものなまなまどく従つて
情ぜうよ奪だつへよそひよんひよんみ死し理りざざも迷まよふ
互たがひの仇ごうごう生うれりのふふく終おみみへへおおと
そろそろほほそそり眼まな前まへに刃はくくらのううくくふふああう
ゆゆやや殺ころと覺おえ吾惡わくの二筋道ふたすじどうへ右うと左ひだりの
ままままとと登の麻まくく悪あく娘むすめひゆひゆくくやや入いくく
ややををたた人ひとそそううふふゆゆももばば知しよよくくにに勘かん每まいゆゆ
べべごごととああ吾わの主しのゆゆううききととううたたる

世の中の道理の耻辱の爲め生ずるの有
るど狗の子と云ふ妻のをあざ幸ひ
病の足の道をもひへられ移す
えそれと見るより口くよびて教
え合せばアエのミルヒア日ふ
り組タゞらのあづなれすもさう
いふやあつて

花の香

文里さんとおひでさんとねア何う

もさうのいせきりあめふうけ入もゆ
さぶ今仲の町くまゆいとこくらアあめんとヒ
因 まともあづくア茶屋のきくも氣の毒なり
まく内くよくアてもあづくみい 花のナニの
まよでも文里さんがやうと氣まふひよると
おさんとおもとおづくアヤてのまくひくら内
客ふでもとおげりくと酒でもおげてこれら
とりひつけておなさんとおとくおもくらお

のぐりさん文そんすらあぐつてもより

うううの元世の女郎サアくもあぐんさん文えん

るもなめやのぐん女郎大勢のちやど

トとざいのこそとぞとありもともふの
えんがのけニうのぐれえようのを
間みた文里だりがエヨリアシルゲラレアセがちふうけ
つけもも瘦アセかとろくまそのそぞごよ
よがりまごじりアシルかてよまくをみも

やくふうかアシルことひうひアシルわくれ
へきも尽アシルせぬとと着アシルのめたうひ
ゆアシルともをや尾アシル付アシルんとるもごへど
ての棟持アシルの署やづのちアシルかりで
りさんアシルとその間アシルよもをあく床アシルと
屏風アシルきよふ引アシルせばとことまくもと

卷之六

支里えアトムスルカニシテ称わん

二

でももまくさんともひらくのうとうとあらぬ
月のあつせんへナアモレハモトモまくさんも
あらんよあらわすてよりより氣しが
かくもさうひきと喫^キが今^{ヨリ}よどき
さうでもまく
■又るや角ふせもとうと
花

アイサ子へうそをうそでへもゆせぬ
文 イヤ

卷

花 アイ サモナ トモウトモローナ もとす
ヘ

山のやまとつりあくまと 文マート室よゆ
ゆめうわとくとく日頃のもひひふ百鬼ひ
きくぞくいがんのつまむとくとくとくとく
ひゆふきうりづくひうちとのひのふくら
ときせくろれどもかくぐまよやドさざ
ときれゆくらえくちうなみへけとくあう
きくとく人間へがくとくやそれよもやもくわ

ぐくにまと段めもあまがけやふぶらく
きみねをとひやつゆふ一ト重へうみて物ものと
あすやううひぐるおびえんへざくと
とまをうぐあるやあくづやうもの言
きとびよやんふ子こがむふまでうらうとまを
とらべやしそれが苦ふきうてものを病
あらわすがぬあづよまともれわけや
うかのと夫おととあらうとてとて大さりとまわる

不どひたすらうへ種へナ轉かうつうをあす
死死ふとまよとあらがくふふきうと異い國くにせ
ともやくそくをひきバ二人の子こどもやあとを
駄だ又うのよよ引ひそとせんとまるとくら
それぞくのよよへ苦くもうもくあるをな
御ごもとまくらう變かよ花はなあめくさんさんご乃の
中なかでくまくからそのとでもうせんくら
もうとまくらもひせんくらざくさう

花 そとあゆるの八重柿さんびん種
八重柿 アイ 花 サヤくとももつるぎえどり
アイ 花

花 そこあゆるのハキハキとえどんごれ種う
アイ 花 サヤく おもてのうりとま
空 アイ
花

の花 け子のまつりてつるくさみのまほ
のゆきりであまとアモリギをごらんぐ
な文 ごりう一トキホ 仰てゆるやうどア花

あいらんの妹リミトでもと

トモと文アモリギよりもひるがら
文 アモリギ りきりけり がくそんがいぬりつも
下重シモウヂの田金タケニりとくともタモが駄足タモと
死シテえととづくうけゲサ花 アイサモもと

まうともるもどり おいらんの病氣ゲキの中
も且邪ギザさんもあくさんも殊セリフモラなシテが
きのりギくらうのもどりギとあくまよギ
やうしてああげさんミとえんとりよりのギ
あギさギのギでもと内シテ道奥シテ見シテな
田舎シマツの人がこもれまくありでさんミがのる
ときひえもあへカタが村シテらよミとふ者
がおとよとす子シテくちくうミと

ひきんくら見耶えが一トえとりの
エリテが下のチをんのいふがみどり
大病でうすりやすとひきんくらをや
アがくくもうなエビせんてくアノあまびく
あくびやくのり、ヤアビギナヤせんくら
の子もあるが上総道中の曾我野主
のりび、親あまびくともが村(カムラ)に
て生きのことをかく画親がくらのうてりん

の子のすうふをとてのけとふがくらの内
ちのエリカケリも同ド年よ翠くら
死え、それくらあの子へとてとつ仰又^{アガ}、
ゆふかると直^ドまのわくとく
そく^{サク}翠くらの元^ドきのむをくがくが
うらきこと隔る園のすみとばらんの
駄^{タダ}のやう^トやアキアキとまつとりひ
さんと紙をくさんとくらそくやア

まよひのとをもととまうじびく
も草ことやうひととまうじびく
るのとてともあありのとをも
あえんみめうせえ
きとあんとよびとせち
あうらしづくいわの病ひをそけば實乃
親子ごそくら文ごそくらの
花ももすすやくもむかのものももえん

の病氣の中を見やがうんぬもううん
れとまじめにモアモドキくも
あるやうにまうやうらまうとうま
ふえのうもあらゆりうて
もゆくえふゆくやうくえ
もゆくえふゆくやうくえ
ひ年もゆくやうくもゆく
ゆくやうくもゆくやうく
仕合もゆくやうくもゆく

死んでおこらうと往生するをやうせると
こゝでまあげるくへうらうとげつて
きのとをうめうがのわどがあくらうと
は子をうつまくをもくらへとけとど
日那さんへそじてとぞく變へてねくとろ
りうひひりんととぞくびび福びひまことそ
理よもじれすくとゆあくすくよ名代
のがくむがくいとすくとくとくとくとく

〔文〕アシク文 そのやうふひうなへの福さんへ
死んでおりゆの〔文〕イヘ文 そくとづく〔文〕
イヘ文 やうがく死じともよかとあうナ
花のうさん 花 いへそくがくもくせんよ文 そん
きうふひうなへをまつてまうせとあんど

させゆる **金** アイく見耶さんのおおけで左

西うすさんとおもふあつやどくわき
とがおのこやいとん神かげだくわりう
ひろふみをつらさんともさんのがくくむ
あくべと日よやあらそめうちあさん
みかことじあくさんる紙ひるさんせんと
ひるく自由ふるひとくわ今れゆさん年
ぐれもくさん祝まくまでももかくさんとまく

はてうごくとくとがくをつてあつてあが
もんさんとくとくまくとがくもかくもあが
もくさんゆくもゆくがくぞうとくとくもくえく
文 何のうながれうながへアがくとくとく
の文字まくとくとくとくとくとくとくとくとく

でうのうかくひかやどある **金** いへ江戸
まぐれ十里のまくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

まくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくががもひよどりもせんそくをあひまよ
ゆきのよろこてりゆな風つきとて強きよ
そくらつうをくわうでもと 文 悪人ふられ
もありがゆゑへがぞくとくらうよしご
三千七八のきのきのうつゆくらい医者でもと
文 アクシキモコトカナギ 文 それとも
えりゆれりどびの病の病をこえくらうき
きとエモモコトカナギ 文 アクシ

びやくとくとよ床よつともびうつよその
えくらうちふねくさびくら人のえくらひも
きくやくふくくのくのくさびくくすくの
うとくめぐらゆくもまれんなかくらへひくと
りくらうとくとくとくとくとくとくとくと
くとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
くとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
くとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

妹よやまめがづくひとやうととまへモよく
トゆとりひきとて涙川涙うみよくおれ
沙柳へまつ波まうみよくごくのま
のさげきよはきねのゆわれ墨とも
ひきがくゆめえざれどくせあむひ
まももすうとくべえの香くをまくね

花
八重袖さんモフヌミさんよみよみうり

ゑのそうちひよるとあやどもむらうとむらう
おとせあてもりく斗もま夫みくニ取くちよ
ゆんどくせておめけうとナ因ニヨクモラ往て
あやくがもうてかほのサアドキマリやくトセアリ
金 アイくろくよめくらんがもひるんまく花
のうまんがちくづよせきとこそあんきく
うらうらうらうらうらうらうらうらうらう
まづの山ヒルあんもくよあまく花のうまんとざふ

やてがえりとあみをあせらる
文アミんのけもすくまひくがゑん
がづけみがらあくまんや花のうえんがのへ
まくらはまんとも帰カヨまんともうそざい
もも(西)もあももまくぬと、廊カジへをぐる
ありさんぐをちらみとまくねとばせやくふ
あんせんよつとまくまくら峰カマツチやト峰カマツチ
やうのまがどもかのと因カシそくもぎつてくれ

ると、うれしいぜもきもとまくらやんの妹カミと
おまくらをもむろてひやトヘリヌカの、今カニ
やうざまで見かとんがだくでよのとあ
ちうきのきみあまうたを全あんく峰カマツチ
おとあゆいんがまくらとまくらさぞよみご
えんせうとおぐべ花コレまくまくまくらと
えすとおひみすぐらうとく御カニあくまくら
じすとえまうけてもあくんのとおひざれ

てゆくもアノソツのぞんでもとア
キヨシヒツキナシテウラホリソノヒキ
キアハモヅアヒヨクガラシヨリヨリカトキ
タキシル人ヤギトクソルヒツクスルヒトキ
實うギムヒセキナムヒヌスルモヌスル
ハシヒキトモヅヌミドキナモトモモラ
シムヒエモタクヌミキ人づてモアヒモ
トアヒトモアヒナウシムヒツクモレ

もアヒトモアヒモアヒトモセキトモリヌア
テ一日ニ盲おアサツキトモトモトモ元モヤハ
キモトカトモトモトモトモトモトモトモトモ
ウムナリナシガ結ヌテヒムトコモアヒトモ
ヨモカセキナシトカモトモカセキナシトカモ
カモカセキナシトカモカセキナシトカモカ
カモカセキナシトカモカセキナシトカモカ

おのこゑがよよ十神カミもらひさんせんそ
やまにみのくわゆるすゑすとこつらカツラも三
えうそれゆめをすくめをすくめをすくめをす
きチ一すきとあめよかくとすくめをすくめをす
あくべくべくべくべくべくべくべくべくべくべく
あとごめくとくぬ今のかのくもとよ
もせんせんよあみやへやでもかく申
ざらすのよんをまでおみやへせぬりと

ヒトと相あわすよまをくわうべどむうじくを
とぞくらふスありぬるさんざめやすふきと
もうきとひくとくとくとくとくとくとくとくと
くねをさひまかせがおひくとくとくとくとく
月のせうよまツイ泣クモリありてぬ夜よかとくも
うきくわゆカムでもとくナ文カタカタもきとももの通り
えでも種ヒとがまよまよ後アフタとくとくとく
きうかづかのうちくゆとくとくとくとくとく

うるまくのうづらよかくまく やんがう
さくよりる寒あくわゆくまく さく
さくべしがひのきのあとよく せくらで
まれどちよくとくにゆきからつきせ
きくひうきやのつまゆきのふ
次やよつりあくがゆむだざよ
みえまくつうのうねを一トきくらまく
さくよもひくもくた やく がく

めうへうがちかくさんがあまんからとさす
うきよせかくさんかが通ひとてあげやくとせりを
モウくやまきくじくとあらゆもほゆどぞぐふ
じくすゆやまくらともとくつわくとくわくの名とよ
のもあざのうしきとせりあもとくわくのうれ
ともとくわくもとれと通とくわくとくわくのうれ
きくわくやと酒とくわくやとくわくのうれ
あくまでまなべどの身のうととくわくのうれ

主と申すがまへてやぬと
主と申すがまへてやぬと

まへりのぞもと人えきあそくはゆき安
のゆゑどとひゆるをのせとひのむよ
結をくらごともかよたふやゑつせよわんよ
り生中神仙のゆゑもくぬけらうもとび
がくくがくもと文
あめゆゑくらむ文
おがくふくらむ文テエく姉文とぐれいき文人
とくよのゆゑ文めれいせ文あくは堂文う
うかぐらま文がくみみ五味文かどえ金文

祐のまことひをあきらめずてもも
モウ泣ぬからあらわゆるモウ泣てくよりよ

花

ヨリ一ものかく教をあらよけりとへりともあく
えんのまのむと感はるよすらあらがち
んふるのとすがづとあらひとみとゆきとゆき
玉紙りとくわげやいせとらうともけ子と
よみうまびるなとおうう泣てりとくらうも
りさんよおもよかうひとくらうととあめりと

うそうそうとあまをあらひとけすもあらんの
妹とくひあぐらうのびつうりとくらうとく
あき文さうりばちあらちよどぎうつをでりと
わをとくがねくまむけや子どもがゆづくらう
らひきうとうらうよ

金

文

ア

ア

コナセおうひとくがスといつてもまごりとゆふくらう
せうから今育だすハあらまつうかくとくらう
姉えんのまのまよおまかくとくらうせておえすト

ト注をヒトクハキナガグの教をけぐ

も

文アモウヌムリツムトモアサシトアレクの形
格向リのシテモトマシタマニ安ヨリシムシテ
スミダラ今モヘテクシテナガムリトタマニ
トタヘモトモテモ立モセテレトモアサシ
ト元ゲテカタウ切ケケサセバ 因もつらんのひく
モアモレカドモスルヌシテノヨクタマシ

ナヘセシガコトケモツハジメテムシテモウタリシリのあり
シタリヒツのアリモツニセミルヤトヘツリヤヒ
ミンモモアミンせん浅モシモシヒキドリモト
アキ声ヌキヒヒクシゲ文キモウラギヘキ
ドモウラギヒクシゲモトモアシラヒモモアシラ
モモアシラヒモモアシラヒモモアシラヒモモア
ヒモモアシラヒモモアシラヒモモアシラヒモモア
ヒモモアシラヒモモアシラヒモモアシラヒモモア

花

モモアシラヒモモアシラヒモモアシラヒモモア

とみひせんよ

望

せうが男のち下そ

ミナ

りごとおどがつるのエトリツセアモアシテ

ミナ

ト外のとみありひせんと後をうそひりんせん

ミナ

文 ワリヤア 望よ懐カタとを後悔ハタク 花 後悔ハタク も

あいもみのきえんのわれざよいとさうあくまん文 そんあら
か付さんゆくらうが石原イシハラとさう 文 そんあら
是りくわがゆくせよとよとよ 花 ゆくせよと
よとよとよとよ 文 ウヌがゆくせよとよとよとよとよ

文 人ヒトのじきと

らひきらきききかくうき 花 榛カシへあいせんとすれ
みくらりひせん文 ひづふロヒテアシナとさう

とゆめうきのよみひよみびへくかぐんのゆうわ
がむをと 花 こよどもやぞうやうよなやうな

ちくちく床シマもあやうとも 文 こりようもの
夜ヨへうけみてたまくと經ヨウ夜ヨウもまたもひよ
のこもよもくこゑようちよねば五よもとも

かのくわさかの別れ
花 ちかくさんのかほ
かのくわさかの別れ
塞をもよおしきしてまご
きをのりふくらびとあせんく中宿(中宿)の
うそひのうせんヨ 文 あるゆきのうそひがほ
むえんぐまれとあるゆきがほあるゆきや
せあゆのせせゆと是であるもむゆがたまふ死
じま下ふが死ふるゆき功績

トテラーニの事

お見えうへせよひどちんおふをびへへあそん
ととこもうみにほがまくらせゆくゆふられ
まかわゆるたのとゆとゆくゆる
うるよびとすんでこやぐもおんまくと
のうすねばにれりおやだくとくゆ
うくびにまくくふじ日がふ外みあく
トよこくにのゆみうべりくとて丑湯の
二階もよとめのまき下まく姿めのまくよ
えくとくさんかまくつびとあくみうや
まふ

文 ヤ下えうびしてりうのまに **下え** あめくさんよあ
こまよ **文** リヤあれともおきずとくもりまとて三入
じてもりのよううびとくせくとくくとくとく
とくひうびうのまに **下え** それづめんやうう
くまのうえうくはまくねくコレきぬあま

ヨモギもせんハナ花 ヨヤもせん
ヤヘモセん

トヌクニモトヌカセタ
P.M.T. 1873

卷之二

トえ テモひ子こもくまんを花のうへとよふ
きうちれをりてかみりよつてび文アミンをよじて
ゆげてあくとまんとやくとくとくとくとくとくと
すとをくとくとモウとくとくとくとくとくとくと
あきとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

おのれの身にうつすくあり且ねえのを、まことに床の
ぐるわのとものともえども、かのじに思とうとせん
えとみくし、翠やか、さわやか、やまとみゆきをうき
がはくえども、うござりて、よしとせんとせんをう
きよきつゝも、スモホーのつかひも、はんれんをきか
せきとくとく人のよゑとえをよむと
せきとくとく人のよゑとえをよむと

りうつひやかわらすとまも、まきのとくとくの
町をもよおしとよよとく。思ともすゆとこく
むゑど、おどじよ上ともよ先のうえじゆくと
重ねへゆくせうをきんかうとが、あみをす
ふとおどきよかどくはく文マミラトヨト
ひきよちくとが又もきくさんかニアキ
とがをくせぬとゆくとくのむの屋
おほきとく重ねをまえとくとも花あきとく

ちやくものをうやむりととそれをもせまふか
そくはんかまがからみびとさうりとがうきと
文 そのせうじゆうじゆうがそんかゑよみがくす
子へもづくひエホブモあよくされてもりはやく
下 うそせうそふランナラフシテウマヅクス
まくさんまくまく 文 内外の力のふもつひやうじてく
ひまどもとくがつめくしてけらひ 望 おほ
もあざきものとくとよもあざれとくとく

きでちどりのとねをあわせり一ト年ゆくウコうれ
あらうきよあひだらうてさんとせう縱令うま
ほらうともかとこうかかーの間やせあくとくさん
まみみとくらうらうのくらうめやあくま
せんせんとくらうのくらうめやあくま
あくまにしてあくまへ 因 もうて病氣ひひの
因 アだちじじゆまひとく神仏えの山利生で
もうてくくくうへとくらうせんじよびとくらう

くものちくくくもかーもをあらうておうと
良 ホニニ自由ふるるエラムジヒシが食もひとうふ
トテリウキモドリ寺食ながく今のかくをせうと
せうとくらうとくらうとくらうとくらうとくらう
くらうとくらうとくらうとくらうとくらうとくらう
くらうとくらうとくらうとくらうとくらうとくらう
くらうとくらうとくらうとくらうとくらうとくらう
くらうとくらうとくらうとくらうとくらうとくらう

あめよけのとがみびかのとつてももとまき

みりふとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

うとて經きた夏なつの夜よに鶯ヨシノがみよひとく

ゆく聲こゑのせひかもえくわくわくと

えぐわくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

文カタハトえふまほよ花フシの風かぜとくの風かぜ

さカのひのとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

ゆうのよひよせらる

あまむか西雲やとせらる

はくさんらるホトム

○秋三

秋のどん

さうぞま秋のうたうのマウセラ
と田舎アシへのうちもやうとーえも今アキもや
さとほむじと病アキの本アキひやくらるがく
りふみぞまうれんひとくねのうのむのむ

とくらーある。ときのうがおねにかとく
とくらーある。あうがおねにかとく
うねうねの母アムの母アムの母アムの母アム
うねうねの母アムの母アムの母アムの母アム

四

コレ一トえやくのくと例よ居ぬとるよと考
てそゆふはが入るやうの人のことわづか
のうのうみとがざくらんわざるあつゆうと
ナハ、そのやうよつててのそひうづえと

多めやうあつづくもんとおのやうをあつづく
とあつづく、アワセてくべくとあつづく。肥
いわゆるアヤシムと金とあつづくものあつづ
くがひのゆじゆと算と姑とひかべナニホカ
アラキ色とあたまゆりぬがやつてくれば
アヤリどもおもてくせあらゆりゆうき
えとまくわざもおもてくらの身とごま
うなぐ合勅

めのやうなも又えり。アノソラをもあら
まし。よしもあらがよびんうそ。じゅうをまくわくと神社
のとひそせみと身が。とみもせぬよ時々。雨風
のとひそをさのれ。あもうけやうそち
やうふ。ゆもくとまなゆ。えりとみのも柄とてもも色
がからふ廊のつとみをあらがる。えりかくろとほ
きごれあるかげのうす。やとれおとめ。さくふ。さ
ゆゑどくよせば。やもだくもののこわ。おげ
乃

もとれおぬへがやうふ。がくのうじゆの御みまへよ
せうとのふをくわひて。ひかへひのむかうじよ。

トまを引くうきど一トえんほやるいづか

下えりううみかううをくふくま。まねがまくらじふ孝
の罪。か体。うじゆのうじよ。長の年。季のそめくは。
もとぬ工とくもくわくが。のうづきもあくやくで。兒子
と者のゆめもくば。がくくわくはすまひ。りとやくご
くらうをくわくば。じとくわせせかく。あくやくぞくれと

そくべくよ。りと業人へもくせん。ボニミハひとけ
かく。かくとももとあるなましで。おこちよのゆあ夜の
却。この身のうちとくのゆ。母。とうやくのやうとくの
御のゆもくべ。おのぞらがめくわうぞく。産落
その屋で。然がひきの遠まへがやまくまくうよ。ま
の弱じゆせぬとひほのゆくへやくのあと。まくも
すまも。邪見の駄。今とあるゆの駄。駄。まく
男。かくせゆのと。づきぬ義理。まくど。爰をまく

てある。文アキラの今の身の上。むづかう。シト
ヒト。人の呼更。たゞく病氣でござらう。やだも
ア、温和よ育と。人あひぐの業へ歩みまし
危々々の。とされば。ござるそらんそらん仕事。もわれ
乳母の。胸元の。まみを一つで。さうらよ。人雇と
さびの。多の。便宣の。の。病氣へ。ざううと
づゆよの。こや。さだめて。田舎の。工あゑよ。万自由。ご
めらふつて。遠あゑよ。何んうと。づつても。せと

すこしあり。人見せらるやうなせふ令セ。まうぐ
のあんせんが。病氣がよくなる。が。のじ
きもの。わううと。ざざれが。文アキラが。大切。やまと。
卫兵すくねが。さとく縁が。めうと。トウモロコシよ
もの。れ。思はぬ。さう。ひつと。せと。せと。ゆく。がん
えき。あんねら。さと。せの。よ。よ。ほ。ほ。の。が。御。ま。
きよまでの。縁と。めぬ。めぬ。文里。よ。よ。よ。よ。よ。
さうと。さうと。ひかれて。う。と。が。も。く。も。よ。の。エ。

りまわらへるそでりのあく食下がう。又外ふ湯飲
かへやあらぬとがある。下えもはさんとのあらば
よのびんのやすども。おもてゆきとけをど
痛飲づとのと。モウへりうさかうえまみ母ナ
せまも。ひととくまきづ。ひのむをうめせられ
づ。あらへせひくりくに往び。まくととひぐ
ゑねうもるぬかく。ひととあらがまくもくゆ
るうと。のびよ氣揚ても。昨日へりうや直

かとく しもへうアノよみ正麻くすり十一
までもうい金セアノ慶の江戸でまくおのま。ま
羅病どく。まくとひくよ。まくとヒリヤ。雅か陰
トや。まくがとんせのゆ。トヤツ。それよ娘子のとを
まくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
ても。あ代のさんねのまくとまくとまくと
好み酒を。まくと。アラジよおとひま。トキと

りふねがと。うくうく薬あえぜる。すこが
活は娘されがおきが令めいもあすく。彼かれ是まへ
えひもづドヤ。それともそくとしけがえりくや
あくびがまの是まやうの莫代ばくたい。ススト肩かたて二十九。
りま精せいう。それが出来なまいがト。おおもむかに
薦あらわす。さくどもまくとく考かんてみれべ。并そなへ
仏ぶつのほ陰かげゆあらふ。ハハ痛飲とうにんまのアアママだだぞ
まくらまくらの今いま。又ニニ江戸えどへ遣おとひ。ま

ともす。す尾田舍おひでアノち醫者いじや者しゃとゆきそ
こよどりうのてもえ。それかくよひづき
ぐんせう。けやうのとへ取とり。とくうて
からあひのとひがよのとり。先さきづの痛飲とうにんづ
のつぶす。その時ときまく。じともがあせうとの換かん換かん
く。町まちをまれまく。おののこまうなすうへ
ひまく。まく。もまのお新しんで助すけかく。もまの
令めい。まく。娘むすめがまくとた。冠かんむりの風かぜでまく。

上ませ。まづ早々金匱をかきりとひらめ
のとでかれこれがめぐらす。正月の朝。はとあくまくも
まんの返答えさしを吹てから。まめのやつまくとひで
正月の朝。おもは戸から床ゆかまでゆゑ
りびき。首くびをよもげて。と残生せうとひでゆゑを
まつとやらまつまつ。このひだるみぬまむれ。生
あきらめゆゑ。寝ねらきらひ。おはなよめへど
痛りんまぬのまづとまづとせんせんとせん

ヤ

トトとくに世せと思もう。やくふとくらむちやの
ゆゆ。トとくにとほくらむ。とほくらむ。まづまづ
まづまづくわうとほくらむ。まづまづくわう

まづまづくわうとほくらむ。まづまづくわう

下し見えかえんとまづく合あひ。文里さんとみその中なかへ。
うれしがれとまづく合あひ。正月の宴うたげのつくり。ま
ごとの人ひとのやうする。和わかくともくねる。ま
れのわざまづくと。づとあの中なかの様よう。

おとおをもうせり。外の客うきをまかせて。ひうち
ねのせでまくらまくらこのたまゆるをかたる。うくと
かわのぐら。夜の更よのものとまよ。どうちのまよ
をうがけ。ツイちらとを客人うきんをがくこむとあるを
えりがまのざともあいせん。とくにひくはす。
せんやあとまのじづくもまくねのまよ。ま
かのとくせの中のまよひるがま。らんふきを
かづさやの。がづくとまのひづく。仲町なかまちを

かく。まやか。口よ。子をあ。まよ。うづれ
くら。うれかうとたのんざひもよ。ツイ五月アマメイ
流產アマミよ。まから。園アヅミへまよ。おへがそつづく。ゆ
男の子。ホニモうてうれまよ。お二人えんすも初
まどと。よせらか。てまよん。ほべせらう。晴
う。うとく上アマメイとまよ。おの子をぬよ。よ
かう。守育アマメイとみ。別アマメイらう。ゆめ
のよびよまよ。おままで。生アマメイい。もよひ。まよ。うき

りまへるがおよからぬす。まへとをうらむ
人されど。あらうふもどりみゆ。ひととよき
もあらぐ。まへてひづれゆめよナゼね
けやうなまでもそく **母** モウニミカモのまく
スミモダフ。シムヘアキモレハモ。だくナ乃
金よかく。エアハナギ一そんハ痛飲。どよ。キ
マセハタケ。衣厚ゆき。考もとくとひよ。
キミモタク。一がひ一ツ。モヌトサル。

めひとりやく ちよとをよけりしゆ。返るのせ
ぬ。げたとひのりこのみがうて。さうしても吹
ぬのう。さやまくがゆい。がくえなむれ。あら
ざまくのうひゆか。ひつまひひてうきわく
よ。け母か死よひとれがじよくとも
トもど一そく。うそく

【三】かんえき。モウくまくとひひくひく
トうそ。そのまなきふみとひくともええ

まか母 そんうのうきアリケテシキの「一き」それ程追
ハヘヨウアセトヘタベセテシのもと。シテハ
セラシテシカ。カクガのヤドガモシテヒ。アヘアゲシテ
シテシ。ナウエヌアリシムを通りよおつて
カム。アヘーんをセトヘモソシモナヘ母 そんうの
セラシテシカ。アリの經年セナリ。モアミ
スルナエツテ。アヘアと迫テシキアリ。一き トシ
タスモヤウ。カタタシモテ くまの画ひと

リヌキハシカ トシキモ人ニモシテナハアラ
一き ちるけ身よろそのお歌をセアラヤア。母 かき
マクレセシ。アリ。老木の又ロヨモラーハナモ 一き
蒼のりりと花の香さん母 ひまば木のかのおくす
一き ものの木ギシアリ。母 生 トシキモアリヤア
シテのまくさん。モヤ後夜セモシテシ遠きの
辯。野川のさざれひづき。アリの木カモシテシカ。モ
クワキシカ

○第四

ちるの段

おもてらるのせ用よづなをもぐるへけ家の
うち。年賀祝うてめでとまよびやまく
文里がかんごう。妻も子どもも祝う。憂
むひくる林櫻

假文是やうび不孝へりてかくぬと。されやう
八十どりうき年よすれど。ふくゆくうそゆ
うちや猪等。賀の祝へとひきよ。ひ

ゆうしきうと。とうれい。勘定とゆくと。し
くろい中のうびと。アケて舌城子のまゆのせ落灰。
まきまびて勘當へや。とくに。ばくもまくの通
堅くも孝を堅く。せきくわなゆがんりく。もまと
えりかくへがとの医局よよりて。あ紙せみや
さみ文。まくまくのまくと。まくまく。年うぶ
りうじゆの年賀。まくまく。

トあれ有がまくをすド上まく 因カハジマサリヒキセ
スリヤアシム。アラヨ。女との事の事多アラシタシム。アリセ
モツハシム。寶若モツムダ。アリセモツムダ。アリセモツムダ。
キヤク音テヤミレガアガリキヨジタキ。アリセモツムダ。
トアシムガアマツムギ。アリセモツムダ。アリセモツムダ。
モアシムサアリセモツムダ。アリセモツムダ。アリセモツムダ。
アリセモツムダ。アリセモツムダ。アリセモツムダ。
又モツムダ。アリセモツムダ。アリセモツムダ。

國事あらばもやうへやまへすまゆるがくも承
ゆきりゆもゆきりあまへこゑりばら國事あらま
きんのまへやまへのれりあらはるをやざれどもよ
くまよフウヰシドモ國事あらまへとく
どものばくまへとくまゆりやざれどもよ
きんのまへやまへのれりあらはるをやざれどもよ

トモニシテハシムカニシテ
トモニシテハシムカニシテ

卷之三

トはもひづかずふ。田舎りや痛飲も。丁度とま
れ一たまらます。耳くらつて引ひびて。舌感よひひ。
〔風〕葉代さうのうをたまひの女。トはもひづかせ
まくさむぞれがさう見がひま。

一切かげも。おとづれひきこも。おせんじよ。

卷之三

谷コリヤをとむらとあづみ。アマガの女
を慕がよ。むかしのまへりとまくきくと
せだ。二度のつゝあとさわうと。キウトモが
ハヌカナ文のちまきあひ多けれど。まだれあくら
れハむ。サアうけとく。コリヤも今サ歎。空ありと
あそぶあるまつが。アタヒ。子へ。空やまもあそぶ。ゆで

卷之三

تَعْلِمُونَ

谷
蒙古文

谷 ものやがかられがせんとあるヨイ
トモジターカモキニサガ。痛りんがもなき。





